

特 集

「子どもについて考える」

子どもを取り巻く自然環境、社会環境そして経済環境の変化は、子どもの成長や人格形成などに影響を及ぼす。次世代の担い手である子どもについて考えることは、現在の社会状況を知るだけでなく、未来社会の形成過程を探る上でも重要なファクターであろう。

子ども学科の開設を機に、各分野の研究者から子どもに関する知見を寄せてもらった。

子どもの興味と児童文学 －『不思議の国のアリス』を中心に－

表現文化学科教授 小 原 俊 文

子どもを読者とし、大人が書く小説、エッセイ、戯曲、詩、を一般的に児童文学と呼んでもよいであろう。これに絵本が加わると、もうひとつ広義の児童文学となる。

さらに児童文学におとぎ話や民話を入れるべきかどうかは、議論のあるところであろう。それらは歴史的に見れば、児童のみを対象としたものとは限らず、児童文学の祖形であるとはいえ、児童文学とは区別されるだろう。そのため本稿では、児童の読者を想定し、その興味関心を勘案して書かれ、出版された近代の文学作品を児童文学と捉える。

19世紀のイギリスにおいて、児童文学は大きな発展を遂げた。18世紀以来の子ども観の変化、すなわち子どもが大人の関心の対象になりうるとする子どもへの興味を帯びたまなざしが生まれた。またイギリスという国が、大英帝国と呼ばれる政治的、経済的発展を遂げ、国内経済の発展に伴う生活水準の改良、そしてその速度は決して速くはなかったが、労働法や教育法の制定による弱年児童労働の禁止と義務教育の普及、ジャーナリズムや印刷・出版業の発達などが児童文学が集中的に登場する要因となった。

『アリス』の出版とその意義

とくに記念碑的な作品として挙げられるのが、1862年にルイス・キャロルの名で、オックスフォード大学の研究員であったチャールズ・ラトウィッジ・ドジソンが発表した『不思議の国のアリス』（原題 *Alice's Adventures in Wonderland*）であった。この作品は、子どものた

めのエンターテインメントとして書かれた最初の児童文学作品とされる。物語の発端は、ドジソンが学寮長の娘たちとボートでハイキングに出た際、アリスの求めに応じて、アリスを主人公とする物語を即興で語ったのが始まりとされている。作品の序詩にある ‘There will be nonsense in it!’ 「ノンセンスを入れてね!」というアリスの言葉が、この作品の主なトーンを決定した。

この作品の基調が「ノンセンス」であることは、文学に対する子どもの関心がどこにあるのかを示すひとつの証拠でもある。より広く考えると、ノンセンスのみではなく、パロディ、替え歌、駄洒落、語呂合わせ、なぞなぞのような、言葉を人為的に操作する言葉遊びが中心になっていることに気づく。言葉遊びによって日常の現実や倫理が逆転し、論理のたがが外れ、想像力が自由に羽ばたくと同時に、普段の見慣れた世界が崩れていく不気味ささえ感じさせる。作品末尾で、すべては夢であったとして最終的には日常の世界に復するのではあるが、この作品の持つ奇妙な味は、非常に印象的である。多くの児童文学作品、とくにファンタジーやノンセンスと呼ばれる分野の作品には、こうした一種異様な読後感を伴うものが存在する。

また一般的に言って、作品の中で、主人公の性格、行動、心理をどのように描くかということは、子どもの関心を引き付けるためには大切である。読者である子どもは、作品の中でとくに主人公の行動を中心にして、物語世界を読み解いていく。その際に、時には理想的な、あるいは自分が容易に感情移入できる主人公を求めるであろう。この意味で主人公の造形は、重要な要素である。

言葉遊び

児童文学作品に必ずしも言葉遊びが必要なわけではない。しかしながら、子どもは言語を習得し、使いこなせるようになる時期には、言語そのものに強い関心を示す。母語習得の臨界期説もあったが、経験的にも12歳ぐらいまでには母語の習得がほぼ完了する。しかしながら、子どもの行動を観察すると、言葉遊びの中ではまだ現実意識が弱いことに気づく。言い換えれば、言葉のための言葉の遊戯であって、面白い言葉を口にしたり、作りだしたりする行為の中では、そうした現実や論理はいわばカッコに入れた形で凍結される。とくに注目されるのは、この時期の子どもたちが言語における音への関心を強く示すことである。その次に意味が来る。そのため言葉遊びにおいては、まず音の連想が先行することで、意味が浮遊し始めるという事態が生じる。

『不思議の国のアリス』における言葉遊びには、パロディ、替え歌、駄洒落、なぞなぞなどがあり、子どもの言葉に対する興味にうまく対応している。一例を、パロディにとって考えてみよう。

この作品にはいくつかの秀逸なパロディがある。アリスの物語世界の支配的な価値観は、当時のイギリス上流中産階級のものであり、堅苦しいモラルが支配する世界である。この硬直したモラルが、パロディによる諷刺の格好の材料となる。さらにパロディが成立する前提は、子どもが元の詩や歌を良く知っていることが必要であり、ナーサリー・ライムや子どもたちが教室で暗唱させられた詩などが対象になっている。それらに対する子どもらしい反発が、子どもたちの人気を得た大きな理由である。またパロディの対象がとくに替え歌や詩の場合には、リズムと口調とが、身体的にも子どもを快適にさせる。この音韻の魅力は、意味の前に音が先行する言葉遊びの特徴を良く示している。

こうした様々な言葉遊びが作品に大量に取り入れられ、子どもにとって大変楽しい作品になっていると同時に、先に奇妙な味と呼んだ日常の世界が崩れていく感覚が生じる。この作品のタイトルになっている‘Adventures’とは、アリスが物語世界の登場人物たちとの間で、いかにコミュニケーションが不可能かを体験する冒険物語を意味する。その主要なテーマを決定するのが、言葉遊びによる発信者と受信者の間の意味のずれ、あるいは誤解である。言葉の意味が崩壊するにつれ、アリスは自己のアイデンティティが揺らぎ始める。作品の展開につれて彼女の言葉はますます現実の強固な裏付けを失い、第5章の芋虫との会話で“because I'm not myself, you see.”という言葉で極まる。その反対に、彼女が夢から覚めるのは、“You're nothing but a pack of cards.”という、脅威の相手のアイデンティティを正確に名指しする言葉によってである。ここに言葉の意味とその指示対象とが完全に一致し、アイデンティティの揺らぎがなくなり、現実原理が一挙に侵入する。この名指しの言葉の前の場面では、言葉遊びの支配する夢の世界が悪夢の様相をさえ帯びるのであるが、ここで言葉によって現実が奪還される。しかし、言葉はもう遊ばず、その機能はコミュニケーションという実用に限定されてしまう。物語世界の終結と同時にアリスの子ども時代の終わりが予兆される。それゆえ、作者が『鏡の国のアリス』で最後にアクロスティックの形式で語る詩は、過ぎ去った時間を感じ傷的に回顧し、喪失感を滲ませる。そしてその最終行では、「人生、それは夢にしか過ぎないものか？」と自問するのだ。

主人公の造形

ここで簡単にはあるが、この時代の児童文学の主人公がどのように造形されたかを見ておこう。19世紀イギリス文学を代表する小説家チャールズ・ディケンズは、『クリスマス・カロール』や『骨董屋』などで忘れ難い子ども像を描いて見せた。この世と神との仲立ちをするかのような理想化され清浄なイメージを付与された神聖な子どもが描かれ、人々の大きな共感を得た。こうした子どものイメージは、先に述べた大人の子どもの興味を帯びたまなごしを体現したものである。同時に、このような理想化された子どものイメージは、この時代の児童文学作品にも大きな影響を与えている。

しかしながら、『アリス』で描かれた主人公のイメージは、こうした理想化されたものではない。この作品が、主人公のモデルであるアリス・リデルを聴き手として作られた事情から、ほぼ等身大の子どもが登場する。アリスは、知ったかぶりをし、好奇心が旺盛で、食いしん坊で、おしゃまで、おせっかいで、元気はつらつとした10歳の少女である。物語中で戸惑い、泣き、怒り、勇気をふるってハートの女王に反発したり、感情を豊かに発揮する。さらにことさらにアリスの言い間違いが強調されるのは、彼女の現実の姿でもあり、かつそこに魅力を感じていたキャロルの愛情が主人公に対する滑稽なからかいとして描かれるからである。語り手が主人公の行動を語り、嬉々として‘poor Alice’と形容する時の主観的な思い入れを込めた口調が、作品に生き生きとした感情の動きを与えている。

同じように子どもに執着し、成長することの嫌悪を描いたもう一人の児童文学作家J.M.バリーは『ピーターとウェンディ』で、当時の男の子たちが冒険ごっこで空想した世界そのものをネヴァーランドとして描き出す。主人公たるピーター・パンは、そこで永遠に自由気ままに子どもの状態を享受することができる。しかし、それには成長の拒否という大きな代償を払わねばならない。ウェンディを含む他の子どもたちは必然的に成長して行くために、記憶

というものをほとんど持たないピーターは、彼らの世界から忘れ去られていくしかない。それゆえにこの物語では、ウェンディの方が読者の感情移入が容易で、現実の子ども像に近い描かれ方をしている。むしろウェンディが主要な主人公なのではないかとさえ思える章もある。ピーターをあまりにも無責任で空想の世界でしか存在しえない造形の仕方をしたために、男の子の空想的な冒険譚を無邪気には楽しめないのである。これは、成長することの拒否をテーマにした作者の思想そのものに根差す欠陥であろう。

両作品の主人公であるアリスやウェンディに体现したより写実的な子どものイメージは、その後の児童文学のなかで「教養小説」（ビルドゥングス・ロマン）の形式で、読者に身近な存在として造形されていく。現実の子どもは理想でもなく、大人の勝手な思い入れに沿うものではないのは当然である。さらに文学自体が世紀末の混沌を経て、より写実的なものを描くことに変貌していった時代には、児童文学もまた変貌せざるを得なかったはずである。たとえば、『アリス』や『ピーター・パン』と同じくファンタジー文学に分類できる現代の『ハリー・ポッター』のシリーズを見ても、主人公は写実的であり、現実存在するタイプである。19世紀から20世紀の150年あまりを経て、児童文学に描かれる主人公は理想から現実へとそのイメージを大きく変化させて来た。今後さらに、どのように変貌しようとしているのだろうか。それは、時代精神と子どもたちをどのように捉えるかが決定するはずである。そうして、新たな作品が生まれ、読み継がれていくのである。

子どもに安全な居場所を

人間心理学科教授 荒 川 由美子

子どもに必要なことは？

児童虐待とか、いじめとか、DVとか、アダルトチルドレンとか、子どもたちにさまざまな難問が生じている昨今である。しかし、これほどに「特別な難問」でなくとも、子どもが育っている環境には、親や身近な大人たちが気付いていない難問もある。「子どもについて考える」というテーマについて、筆者が心理臨床から学んだことを語ってみたい。

夫婦喧嘩もその難問の一つだ。ある精神科医が「子どもをおとなしくさせようと思えば、目の前で夫婦げんかをしてみたまえ」と語っていた（注1）。子どもは魔法をかけたようにおとなしくなるから、というのだ。ただし、きちんと修正しないと「後で高くつくことになる」とも。大人にしてみれば、止むに止まれぬ夫婦喧嘩なのだろうが、見ている子どもには居心地が悪い。「止めて」とも言えない。自分はこうしたらいいのだろう、どこかに行ってしまった方がいいのだろうかなど、ひどく不安定な心情になる。

子どもにとって、安心できる居場所の確保はとても重要だ。

一人の少年が語ってくれたこと

こんな喧嘩もなければ、虐待も、いじめもなかったのだが、安心した居場所がないと感じて

いた一人の少年がいた。筆者の担当するカウンセリング場面で出会ったのだ。小綸（こりん）という綽名をつけたこの少年は、当時、小学校3年生。年末の寒い時で、風邪を引いているという理由から、喉は真綿ですっぽりと覆われていた。あ、言葉どおりのことが行われているものだと、妙な事に感心した。彼は、まさに、真綿にくるまれたような人生を送っていたことが後になってわかってくるのだが。

小綸は思うように歩けないのだった。骨折しているわけではないので、松葉杖もない。左右の壁に交互に手を触れながら目標地点まで進もうとすると、当然右に左に身体が揺れて、危ないことこの上ない。座ってよい状況になると、身体全体がその椅子めがけてどさっと投げ出された。何とも辛そうだった。

小綸の問題の始まりは3年生の秋頃。40度近くまで熱が上がり、その後、食欲不振・便秘・右下肢痛とさまざまな症状に苦しめられていた。家族は心配のあまり、評判の高い病院を幾つもまわったが、どこの病院でも「異常なし」という診断だった。もちろん、どの病院でも可能な限りの検査を実施していた。もはや、身体の問題ではなく、心の病気であろう、と多くの医師たちが考えるようになっていた。ふつう、このような経過をたどると、患者の家族はショックを受けることが多く、「心の病気」を受け入れにくくなりがちだ。しかし、小綸の家族は、「心の病気ですか。それで安心しました」と答えたというのだ。家族の気持ちとしては「心の病気ならば、命までなくすことはないでしょう」と言うのがその理由だった（注2）。

何ゆえ、心の病気であれば、安心するのか？ 小綸との遊戯療法の中でこの疑問が解けていった。小綸には「何々をして遊びたい」とか「何々をしよう」という他者に呼びかける意思がほとんどみられない上に、動き回ることも出来ないので、絵を描く遊びが選ばれた。意外にも、彼は、夢中になって描き始めた。

小綸が「歩けなくなった」理由を想像させる絵を描いたのは、数回たった頃だった。いつも画用紙に黒のサインペンで描き、後で色づけするのが小綸の描き方だったが、この日も、まず一つの四角を描く。何？とたずねると、彼と祖父の寝室だという。次いで長い長い廊下を描かれ、茶の間や台所、店舗など、いわば生活の中心となるべき場所に行き着く。祖母と両親・妹は、その茶の間付近の部屋に寝ているのだという。長男であり、跡取りでもある彼は、とても大事にされており、少年の身ながら奥座敷を寝室にしているのだ。二つしか年齢の変わらない妹が両親の間に川の字になって寝ているのとは大違いだったのだ。

小綸が育った時代は、21世紀の今日よりもっと家意識が強かったし、「跡取り」が存在するかしないかは重要なことだった。特に小綸の兄に当たる男子を突然の病気で亡くしていた家族は「今度こそ」元気な跡取り息子をと、真綿でくるむように、大事に大事に育てていたのだ。小綸の兄を失った悲しみが大きかったがゆえに、家族が小綸を縛りすぎたことは否めない。しかし、当時の祖父母や両親にとって、家を守りつづけることもまた、大切な使命だった。当然のことながら、「伸び伸びと育ててほしい」という言葉は、小綸の家では聴かれなかった。少し咳をしただけでも隔離される生活が続いていたのだ。小綸が望んでいたことは、「お父さんとキャッチボールすること」、だったのに。

大人の判断を束縛と感じ取った8歳の小綸は、身体を使って意思表示したのだ。

子どもに精神の自由を、と思う。

小綸は、自分らしく生きることが出来るようになったのか？

4年生になってしばらくしてから、小綸は、「学校が忙しいからここにはもう来ない」と言う。あれほど望んでいたお父さんとのキャッチボールも、「もう、忙しくて、やってあげられないんだよ」(!) とのこと。真綿でくるまれる必要がなくなった小綸は、自分のしたいことを、自分で判断し、決定している。

子どもが自分らしく成長していけるよう、大人には、安心できる、安全な居場所を提供することと、子どもの精神の自由を尊重することが必要ではないだろうか。

注1 中井久夫・山口直彦 看護のための精神医学第2版 医学書院 2004年

注2 荒川由美子 子どもに精神の自由を－絵地図への旅 文学と教育 162号 14－21 1993年

子どもの生活と仲間関係

子ども学科教授 杉 山 弘 子

＜はじめに＞

筆者の専門は発達心理学である。主に保育現場での観察を基に、乳幼児期の遊びや仲間関係について研究してきた。しかし、研究データを得るために現場に出向くだけでは、子どもや保育の理解には近づけなかった。障害児保育のボランティアとして、あるいは子どもの育ちや保育について学びたいという願いを受け入れてもらい、保育園に通うことで時間をかけてわかってきたことがある。また、保育者との研究会で保育実践を検討したり、実践記録を読んだりすることで学んだことも多い。これらの経験の中から印象深い2つのトピックをとりあげ、「子どもの生活と仲間関係」について考えてみたい。

＜保育者による子ども理解と仲間関係＞

同年齢あるいは比較的年齢の近い子ども同士の関係を仲間関係と言う。保育者は子どもが安心して遊び、生活するための基盤としておとなとの信頼関係を大事にするが、それだけでなく、子どもの生活をたえず仲間関係との関連でとらえているようである。

例えば、青木（2007）は0歳児クラスの実践記録の中で次のような事例を報告している。食事に意欲的であった12月生まれの子どもが11月頃から食事の時間になると機嫌が悪くなり、食べさせようとすると大泣きするが、スプーンを手にしたとたん次々と食べ始める。その姿を見て、「周りの大きい子たちがスプーンにも挑戦している姿を見て、いつか自分もあんな風にしたいと思っていたのだろう」（p.7）と青木は考える。

この事例を読んで筆者が考えたことは、生後11か月頃と推定されるこの時期の発達である。おとなにしてもらっていたことを自分でしようとするようになる、その時期がきたものと理解した。そして、青木の見方がどこからくるものなのかがわからなかった。しかし、先の実践記録の次の記述を読み、子どもたちと生活を共にしている保育者ならではの子ども理解があるこ

とに気づかされる。

一人が水道のところにつかまり立ちができるようになり、鏡を見たり水道の蛇口につかまり楽しんでいると、ハイハイができるようになった子が“いいなあ”とその子を見ながら水道のところに近づく。しかし、つかまり立ちはできないので水道下であそびだす。その子がつかまり立ちできるようになるとうれしくて、手洗いもずっとやっていたいと終わりにすると怒るようになった。すると次につかまり立ちの時期を迎えた子が水道下へと向かっていく…。(p. 8)

このように子どもが他児の姿を見て意欲をもち、時間をかけてできるようになっていく過程を見ている保育者にとって、スプーンを持ちたいという子どもの要求を周りの子どもとの関係で理解することは自然なことである。保育者は生活と遊びのさまざまな場面での姿を時間の流れの中に位置づけながら子どもを理解する。そのとき、浮かび上がってくる重要な側面として仲間とのかかわりがあるということであろう。

＜仲間との共感と自己認識＞

1歳児では誰かがカーテンに隠れれば他の子どもも隠れる、誰かが走り出せば走り出すというように、子ども間に同調的な行動が見られる。他児の行動に楽しさを見つけた子どもが同じことを始めると、そこに楽しさを共感し合う雰囲気ができる。自分がして楽しいだけでなく、同じことをする他の子どもの楽しさを感じているようである。

子どもたちは楽しさを共感し合うだけではない。他の子どもとのかかわりで「自分」を意識する経験や、他者の要求に気づく経験をしている。次にあげるのは筆者が保育園で観察したエピソード(杉山, 2000)である。

散歩先で松ぼっくりを拾っていると、あいちゃん(2:1)が、「あいちゃんのない」と筆者に言ってきました。隣にいたさきちゃん(2:2)が1つくれましたが捨ててしまいます。そして、また「ない」と言います。

さきちゃんがもう一度差し出しますが、首を横に振って受け取りません。筆者が、「あいちゃん、自分で拾いたいのか」と問いかけるとうなずきます。それでもさきちゃんが、「ボーイしないでね」と手にもたそうとすると握りますが、また捨ててしまいます。そして、自分で探して拾うと、「あった」と見せにきます。やはり自分で拾いたかったようです。(pp.123-124)

あいちゃんにとっては、自分で拾ったものが自分の松ぼっくりである。ものを手に入れるにしても自分がどうかかわるかが重要になる。しかし、いつでも自分であることを主張するわけではない。散歩の帰り道、あいちゃんは他の子どもが保育者に木の葉をとってもらっていると、自分もとってもらいたがる。2つの場面に共通しているのは、他の子どもがしているように自分もしようとしていることである。要求の中身は異なるものの、他児の行動を見ることによって、「自分の」「自分も」という意識が鮮明になるものと思われる。

さきちゃんがあいちゃんに自分のものを分けてあげようとするのは、他の子どもたちも含めて松ぼっくりを拾っている状況の中であいちゃんのことばを聞き、松ぼっくりをほしがっていることがわかったからであろう。自分で拾いたい気持ちまでは理解できないにしても、友だちの要求に気づき、こたえようとしている。子ども同士の間にもこのような他者理解とかかわりが見られることに注目しておきたい。

＜おわりに＞

2つのトピックとも3歳未満児の生活と仲間関係に関連するものである。3歳未満児においても、仲間の姿を見ることは活動への意欲につながる。楽しさを共感し合う関係も見られる。さらに、仲間との関係で、「自分の」「自分も」と「自分」を意識する機会が生まれる。集団保育の場においては、おとなとの関係ばかりでなく、仲間とのかかわりを通して社会性や自我が育まれると言ってよいであろう。0歳時期からの仲間とのかかわりを子どもの生活と育ちの豊かさにつなげていく保育の展開が大切であると考えられる。

＜文献＞

- 青木浩子（2007）大人との信頼関係を土台に仲間の中で大きくなっていく0歳児．仙台保育問題研究会編『みやぎの保育』第九号，3－9
- 杉山弘子（2000）2歳児．心理科学研究会編『育ちあう乳幼児心理学』，有斐閣，123－142

子どもと運動・スポーツ －指導者に求められること－

現代社会学科准教授 福 井 真 司

運動・スポーツに対する考えは、その経験によって千差万別である。まず、スポーツの定義と効果について確認しておきたい。

＜スポーツの定義＞

身体運動をとまなうスポーツがもたらす影響は、人生を豊かにし、充実したものにする。そして、①身体的 ②精神的 ③社会的な欲求にこたえる文化の一つである。生涯にわたって運動・スポーツに親しむことは、極めて大きな意義がある。

＜運動・スポーツが子どもに果たす効果＞

（1）身体的効果

運動・スポーツは、成長・発達に必要な体力を高めることはもとより、病気から身体を守る体力を強化し、より健康な状態をつくる（生活習慣病のリスク減少）。

（2）精神的効果

運動・スポーツに親しむことによって、人間の本源的な欲求の充足を図るとともに爽快感・達成感などが得られ、精神的ストレスの解消を果たしている。そして、物事に取り組む意欲や気力の充実にもつながる。

（3）社会的効果

運動・スポーツを通して、他者との関わり（思いやり）を意識するなど、集団活動に不可欠な社会性の理解を深められる。

運動・スポーツの実施は、近年の社会問題と密接な関わりがあり、その解決の一助となることを期待されている。

＜子どもの体力の現状とその要因＞

では、運動・スポーツは期待されている効果を果たしているのだろうか。文部科学省が行っている「体力・運動能力調査」によると、いまの子どもたちは1985年頃をピークとして基礎的運動能力（走・跳・投）や筋力に低下傾向がみられ、柔軟性、敏捷性などの身体をコントロールする能力についても同様の傾向がみられる。その一方、身長、体重などの体格については向上している。

では何故、体格が向上しているにもかかわらず、体力・運動能力が低下する傾向が現れているのだろうか。その原因として、①運動・スポーツ（遊び）の減少 ②食生活・食習慣の悪変 ③睡眠不足とメディア漬けなどのライフスタイルの激変が指摘されている。その一つ「運動・スポーツ（遊び）の減少」に注目してみる。ある調査報告によると、当時の小学生の一日の歩数は、平均12000歩である。30年前の小学生の平均歩数は27000歩であった。一日に5000歩まで達しない子どもが存在するという。一日5000歩以下という、登校と下校、それと教室の移動のみしか歩いていないことになる。このような子どもたちは、休み時間や放課後にほとんど身体を動かすことがない。運動の量が激減してしまっているのである。これらの要因として、子どもの運動（遊び）から「時間・空間・仲間」の喪失が指摘されている。いまの小学生の放課後の遊び「時間」は約50分と30年前の半分以下、遊び場所である「空間」は室内（家）、遊び「仲間」は3人から4人の限定された同学年の友だちといった現状である。つまり、塾などの勉強に追われる日々、家の中で電子ゲームに夢中になっている子どもがほとんどということになる。

また、別の調査では、運動・スポーツの「運動実施率」と「運動が好き・嫌い」についてのアンケート結果を報告している。その結果によると、「月に数回くらいしかやっていない」または「ほとんどやっていない」割合は16.5%、「苦手・嫌い・興味がない」はほぼ20%であった。運動不足と運動嫌いなどが、ある程度存在していることがわかる。このような現状と要因をふまえて、指導者（教育者）は全体（平均）だけでなく、個にも目を向けていくべきであり、さらに、その原因と対応が求められる。

＜運動・スポーツと誕生月＞

子どもの体力や運動・スポーツに対する意識について、個人差を生む要素はいくつかあるが、その一つ「誕生月が与える影響」について考えてみる。

わが国では、4月を年度始めとする学校制度をもとに学年制が布かれている関係で、誕生月が1～3月までのいわゆる「早生まれ」と称する子どもたちが存在する。同じ学年内において4月や5月生まれの子どもたちと比較すると10ヶ月近いタイムラグの影響は大きく、あらゆる競争において不利益があるとされている。特に、運動・スポーツの場面において、成長期の段階ほど神経系の発達や体格・体力等の差に起因する不利益は顕著で、運動・スポーツ競技種目の選択や競技開始時間ももちろん、競技の継続・離脱に大きく影響すると考えられている。そして、これらの影響は比較的競技環境が整い、幼少期から盛んに行われるメジャーなスポーツ種目において「早生まれの優秀選手が少ない」という事実を表出している。

では一体、何を原因としてこのような現象が現れるのか。現在推測されているものを以下に列挙する。

- (1) 勝つことを優先する指導者が体格や運動能力に優る子どもを試合で優遇するため、出場機会に恵まれない早生まれの子どもが興味を削がれ競技離脱に至る。
- (2) 身体接触を伴う運動・スポーツでは、体格・体力の劣勢に起因した接触時の度重なる失敗経験から運動・スポーツ離脱に至る。
- (3) メジャーなスポーツほど競技開始からトップレベルまでの競技人口がピラミッド型を形成している。成人に近づき競技レベルが上がるにつれ、スクリーニングされる形で早生まれの選手が競技継続を断念する。
- (4) 早生まれの子どもをもつ保護者あるいは子ども本人が、運動・スポーツの選択や開始時期を上記(1)(2)の既知情報を重要な判断材料にするため、接触を伴うスポーツを敬遠あるいは思いとどまるなどする。

指導者(教育者)は、これらが「運動・スポーツ離れ」や「運動・スポーツ嫌い」の原因の一つになることを理解し、場の提供の仕方に工夫や配慮が求められる。何よりも「運動・スポーツが大好き(楽しい)」という財産を子どもに持たせて、次のステージに送り出すことが重要である。子どもに関わる現場において、指導者(教育者)の質の向上が求められること、子どもの未来に触れていることを自覚してもらいたい。

＜おわりに＞

今回、運動・スポーツの効果の一つである身体的効果「体力」を主に、現状と課題を示してきた。それ以外の効果として、精神的効果「こころ」、社会的効果「つながり」もある。これらは、「体力」のように数値化して比較はできないが、各々が「人間力」には欠かせない三位一体の要素であることを忘れてはならない。

子どもの生きる力を育む参画型まち学習の可能性 ー連携による総合的な学習の実践から見てきた視点ー

生活環境学科講師 馬 場 たまき

「総合はムズカシイ」。これは、小学校に総合的な学習の時間が導入された当初、指導する先生方から頻繁に聞かれた言葉である。2002年にゆとり教育の目玉として登場した総合学習は、教員の模索により進められ、教材不足や指導技術の限界などの問題が浮き彫りにされてきた。その後、2008年に示された新学習指導要領の解説書の中で「生きる力」を育むことがますます重要となることが強調された上で、総合的な学習の時間においては、ねらいや育てたい力を明確にすることが求められた(1)。具体的には、課題を発見し解決するなど、実社会や実生活とのかかわり、探究的な活動を重視する視点が加えられ、地域の人との意見交換や他者と協同して課題解決へ向かおうとする学習活動をより重視する方向が示された。

学校が地域と連携する場合、地域の人を講師に招いて行う「体験重視型」学習が展開されることが多い。このような学習では、子どもたちが地域や地域社会で働く人々を知り、地域の良さや課題を見出すとともに地域の一員として主体的に地域へ関わっていかうとする態度を養うことが目指される。しかし竹内によると「体験重視型だけでは、地域に生起する厳しい意見対立を伴うような問題に対して、有効な解決策を導き出すことは難しい」ことが指摘されている（2）。つまり、実社会に生じる深刻な地域問題をより積極的に教材化する必要があり、子ども自身が解決策を探究する中で地域形成主体の一人であることを認識することが「生きる力」を育む上で重要となるといえる。そして教材化にあたっては、実際に生じている地域問題に対して大人とともに解決策を探究する視点が極めて重要となる。

地域における子どもの「参画」のあり方を早くから提起してきたR・ハートは「子どもたちの参画のはしご」の図において、その形態を8段階に分けて指標を示した。はしごの1段目から3段目までをそれぞれ「あやつり参画」、「お飾り参画」、「形だけの参画」といった本当の参画ではないレベルとし、はしごの頂点である8段目を「子どもが主体的に取り掛かり、大人と一緒に決定する」活動として提唱している（3）。これを受けて、監修した木下は、日本における実践では3段階以下の活動がほとんどであり、避けるべきであるとしている。なぜなら、その多くがR・ハートが言う「社会的動員だけでは子どもたちの民主化はほとんど成功しない」のみならず「子どもの考えが大事であるということよりも、子どもは必要ときに使われるものという概念だけがのこってしまう」状況を招いてしまうからである。子どもの「参画」で重要となるのは、子どもが地域のなかで完全に独立して活動することではなく、地域の大人とともに活動する中で地域社会の一員としての役割を認識し自信へつなげることなのである。そして、子どもたちを支援する大人には、こどもの声を良く聴き、良く観察しながら子どもたちの能力を目覚めさせるきっかけづくりのプロとしての働きが求められる。それでは、本当の参画と呼べる4段階以上の学習活動を展開するためには、どのような取り組みが必要なのであろう。この問いへの答えを筆者が関わった授業実践から考えてみたい。（注）

「総合的な学習の時間」への移行期間中の2000年に行われた仙台市立東長町小学校の実践である。小学校では、前年に行った太陽光発電やごみ・リサイクルの調べ学習を翌年の5学年における環境学習として発展させる検討を行っていた。その頃、小学校が位置する地区では区画整理事業が進行しており、計画を策定する都市整備事務所には、子どもたちの具体的なアイデアをプランへ盛り込みたいという思いがあったことから、小学校と都市整備事務所との連携授業の構想が立ちあがった。学習の全体コーディネートは、建築や都市計画の専門家によるNPO団体「建築と子供たちネットワーク仙台」が担った。筆者も属するこの団体は、米国における環境教育のデザイン手法をもとに独自のプログラムを作成し、数年来に渡り地域の中で活動を行っていた。こうして、学校、都市整備事務所、行政、地域の専門家などが連携しながら4カ月間をかけて授業実践が行われた。

学習の流れは、タウンウォッチング→まちの調査→調査報告会→まちの基準作り→まちのプラン作成→模型作り→完成披露会という順で進められた。まちの基準作りでは、電柱やコンビニはいらないという意見から議論が深まり、障害を持つ人の立場や省エネルギーを考慮するなど、普段とは異なる視点で地域を見ることを学び取った。模型づくりでは、まち全体を30ブロックに分け、子どもが一人一役「区長」「エネルギー委員」「住宅建物委員」「環境委員」などの役割を担い、道路や住宅の位置や量について周辺ブロックと調整を図りながら作業を進めた。

まち全体のチェックは「こども市長」が行い、問題が発生した場合には関係する委員を招集して「議会」を開き、まちの基準に沿ってその都度議論と調整をおこなった。冬休みの間も、子どもたちは各自のテーマにそって家庭の協力を得ながら情報収集や調査を進め、休み明けには情報掲示板を使って、得た情報とほしい情報を交換し合うなど積極的な学びが続けられた。完成披露会では、専門家や行政担当者、保護者を前に学習成果の発表が行われた。まちに「いるもの」「いないもの」の基準作りで最後まで意見が分かれた「小学校」は、子どもたちの要望を盛りこんだ新しい学校として「残す」ことが選ばれた。「いる・いない。道は2つだけじゃない」という子どもの感想から、意見が異なる場合にはより多くの意見を聞き、共通の理解が得られる解決策を探る大切さを、子どもたち自身が学んだ様子を伺うことができる。学習活動の最後に行われた「長町環境都市宣言」を仙台市教育長へ手渡す経験は、自分達の取り組みを社会に位置づける手法を知るとともに、まちを構成する担い手としての自信と誇りを実感させる機会を創出したといえる。そして、次年度の6学年では、継続授業として区画整理事業内における公園計画の学習をすることとなり、再び前年同様の連携のもと幅広い学習が展開された。さらにその後、一連の学習へ関わった教員と専門家による組織「教育デザイン会議」の立ち上げへと発展し、協働で学習カリキュラムを考案するためのシンポジウムやワークショップを開催するなど多面的な活動へと広がっていった。

東長町小学校の取り組みの特徴は、次の4点に整理することができる。1つは、学校・家庭・地域・専門家の連携が円滑に行われた点である。関わった地域の人々は、子どもたちの求めに応じてそれぞれの立場から懇親的かつ継続的に助言を行い子ども自身の学びを支えた。2つ目は、行政やNPOからの資金的な援助により、模型製作や調査活動などの面で、子どもの学習を幅広く自由に展開することができた点である。3つ目は、現実の地域問題である区画整理事業を教材化することにより、地域の複雑な問題を通して意見の対立やその解決策を学ぶ学習を展開することができた点である。そして4つ目は、子どもたちが現実の区画整理事業の進捗段階を理解した上で意見を求められ、子どもの意見を実際の都市計画に活かすプロセスが実現した点である。これより、「子どもの参画」におけるはしごの5段目の段階「子どもが大人から意見を求められ、情報を与えられる」学習活動が展開されていたと言える。

この取り組みから、ヒト（地域の人材）・カネ（資金）・コト（地域の問題）・モノ（教材）が揃う形で行われる総合学習は、教員が抱く「ムズカシイ」側面を取り払い、持続可能な学習へと発展させる視点を見出すことができる。しかしながら、実際の教育現場では、先の事例のような大規模・長期間で行うケースは少なく、現実には例えば学校の花壇の改善や教室の配置計画の提案など少人数・短期間で行う学習がほとんどである。まち学習の実践を数多く行ってきた田代によると、規模の大小にかかわらず、参画の基本プロセスに沿った学習を展開することが重要であるという（4）。そのためには、まずプログラムのはじめの段階から子どもたちが主体的に参画する仕組みを構築し、円滑に導くことのできるコーディネーターの存在が不可欠であり、先の解説書においてもその重要性が指摘されている。

参画のプログラムを構築できる熟練したコーディネーターの登用を促進するには、奉仕が一般的になっているコーディネーターへ報酬を支払う認識をもち、地域の中にその職能を位置づける必要がある。それとともに、授業を実際に指導する教員は、自己研鑽への意欲向上を図ることが求められ、そのための研修場所の整備が急務である。また、まち学習において子どもの参画プログラムを創出するためには、教員自身が他者と協働しながら地域の問題に取り組む経

験を重ねることが有効であると言える。自治体においては、市民活動の支援や地域情報の発信に加え、ハード面を含めたまちづくり事業を展開する「まちづくりセンター」の整備が必要である。ここでは、まち学習の連携拠点として、日々進捗する事業と学校教育との連携や教員の多様な参画の仕組みを備えることが望まれる。

最後に、コーディネーターや教員の人材育成を担う大学においては、コミュニケーション能力を高める教育を行ないつつ、授業や研究を通して学生が地域へ参画する機会を与え、連携の手法と感覚を体得しながらパートナーシップを学ぶ経験を支援する役割が求められるといえよう。

(注)

R・ハートは、「参加」よりも高次で参加者が計画段階から主体的に関わる活動を「参画」としている。引用部分以外の段階は、4 段目「子どもは仕事を割り当てられているが、情報が与えられる参画の仕方＝社会的動員」、5 段目「子どもが大人から意見を求められ、情報を得られる」、6 段目「大人が仕掛け、子どもと一緒に決定する」、7 段目「子どもが主体的に取り掛かり、大人と一緒に決定する」としている。

〈参考文献〉

- (1) 文部科学省 小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編 2008 年
- (2) 竹内祐一 まちづくり学習において地域問題を教材化することの意義
千葉大学教育学部研究紀要第 52 巻 57～67 頁 2004 年
- (3) R・ハート著 木下勇他監修『子どもの参画 コミュニティづくりと身近な環境ケアへの参画のための理論と実際』萌文社 2000 年
- (4) 田代久美 こども環境学研究 Vol. 6 ワークショップにおける役割－子どもの参画を促進する「役割期待」のケーススタディその 2 99 頁 2010 年

子どもの肥満と女児の不健康やせ －出生前・子どものときからのメタボ対策－

健康栄養学科准教授 星 清 子

はじめに

メタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）は「飽食と機械文明、車社会の中で必然的に起こる内臓脂肪の蓄積と、それを基盤にしたインスリン抵抗性および糖代謝異常、脂質代謝異常、高血圧を複数合併するマルチプルリスクファクター症候群で動脈硬化になりやすい病態」と定義され、動脈硬化発症のリスクを 30 倍以上増加させる。現在の日本における診断基準では、メタボリックシンドロームは、その発症基盤である内臓脂肪の蓄積（ウエスト周囲径で評価）を必須項目とし、高血糖、脂質代謝異常、高血圧の中から 2 項目以上の病態の集積によって診断される¹⁾。メタボリックシンドロームが「メタボ」と呼ばれ、肥満、特に内臓脂肪蓄積の代名詞的に今や子供から高齢者まで広く認知されるようになって久しい。現在の日本では 40～

74歳の男性の2人に1人、女性の5人に1人が、メタボリックシンドロームが強く疑われる者または予備群であると報告されている²⁾。そして、メタボリックシンドローム発症の原因究明が進められていく中、胎児・子ども時代の栄養環境の異常が将来のメタボリックシンドローム発症リスクの大きな要因になっている可能性が明らかになってきた。今、我国では若年女性のやせ、低出生体重児、肥満児童、メタボリックシンドローム罹患児の増加が顕在化し深刻な状況となってきた。本稿では、現代日本の子どもの身体状況、栄養環境、生活習慣とメタボリックシンドロームの関連について考えてみる。

子どもの身体状況

2009年度の5歳から17歳児の平均身長を親世代（1979年度調査）と比較すると全年齢で男女共高くなっており、最も差がある年齢は、男子では12歳で3.6cm高く、女子では10歳で2.2cm高くなっている。体重も同様に親世代よりも増加しており、最も差がある年齢は、男子では12歳で3.6kg重く、女子では10歳と12歳で1.6kg重くなっていて³⁾、平均値からみると男女共に体位向上がみられる。しかし、「肥満、太りぎみ」および「痩せすぎ、痩せぎみ」の割合の1980年から2007年までの推移⁴⁾を比較すると（図1、2）、男子は「肥満、太りぎみ」、「痩せすぎ、痩せぎみ」の両方の割合が年々増加の一途をたどっている。一方、女子は「肥満、太りぎみ」の割合は大きく変わらないが、「痩せすぎ、痩せぎみ」の割合が増加、特に12～14歳で1980年から2006年の間に16.7%から31.8%と大きな増加がみられた。20歳以上の成人の身体状況は、男性では40歳代から肥満者（BMI \geq 25）の割合が急増、女性では20～30歳代の出産年齢で低体重（BMI $<$ 18.5）の者の割合が著しく高いことが特徴であり、問題視されている。この状況を子どもの身体状況と比較すると、男性の肥満傾向は9～11歳に、女性の痩身傾向は12～14歳にその端を発していると言える。

子どもの肥満とメタボリックシンドローム

Klish⁵⁾は7歳の肥満は40%、思春期肥満では70～80%が成人肥満に以降し、メタボリックシンドロームの温床、死亡率増加の原因になると報告している。2005年までは、図1、2に示した日比式により肥満度（肥満度＝（実測体重（kg）－標準体重（kg）／標準体重（kg））×100）が算出されたが、2006年度より標準体重に変わって身長別標準体重を用いた算出方法に変更になったため、現在と2005年以前を直接的に比較することはできないが、2009年の学校保健統計³⁾によると、小中学生男児の約10%が身長別標準体重＋20%の肥満傾向児である。さらに、日本の肥満児の15～20%はメタボリックシンドローム、約30%は脂肪肝による肝臓機能異常や高トリグリセライド血症、約16%は高LDLコレステロール血症、約半数は高インスリン血症を合併している⁶⁾。血圧に関しても肥満児の3～5%は高血圧、約10%は正常高血圧で、明らかに非肥満児よりも血圧異常の頻度が高い⁷⁾。また、子どもの2型糖尿病の発症率は学童10万人あたり年間3～5人と推測されているが、2型糖尿病と診断された子どもの84%は発症時に肥満を合併している⁸⁾。すなわち、現在の肥満児はすでにメタボリックシンドロームに罹患、または予備群と言っても過言ではないだろう。このような肥満児増加の背景には、歩行数の減少、運動量の減少、夜遅い夕食や夜食、遅い就寝時間と少ない睡眠時間に起因する朝食欠食率の増加、子どもだけで食事をする孤食や個食、エネルギーの過剰摂取等、様々なライフスタイルの問題が指摘されている。

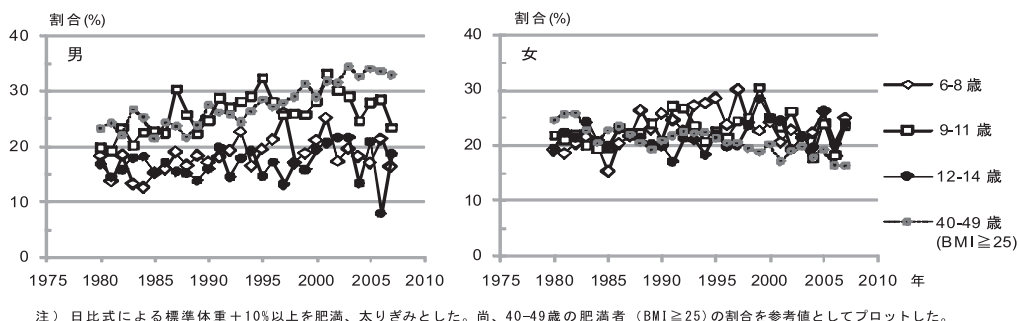


図1 子どもの肥満、太りぎみ者の割合の年次推移 (平成19年国民健康・栄養調査)

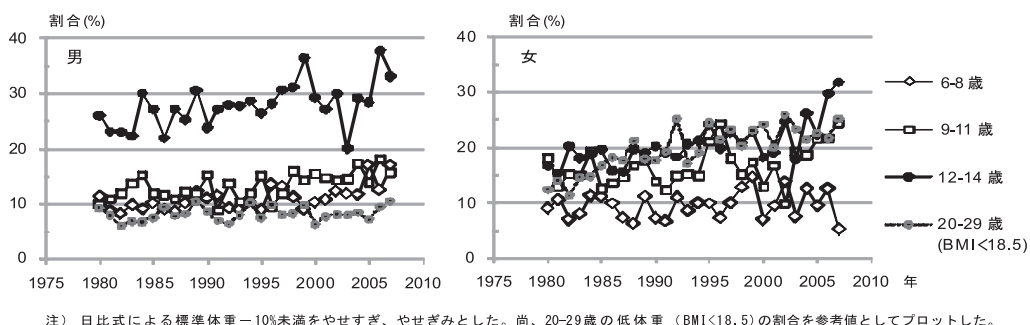


図2 子どものやせすぎ、やせぎみ者の割合の年次推移 (平成19年国民健康・栄養調査)

子どもの肥満と出生時体重

子どもの肥満の原因はライフスタイルの問題ばかりではない。近年、胎児期の栄養環境や出生時の体重が大きく関与していることが明らかになってきた。BarkerはEnglandとWalesにおいて1921～1925年における新生児死亡率が高い地域では、1969～1978年の心血管障害による死亡率が高いという疫学

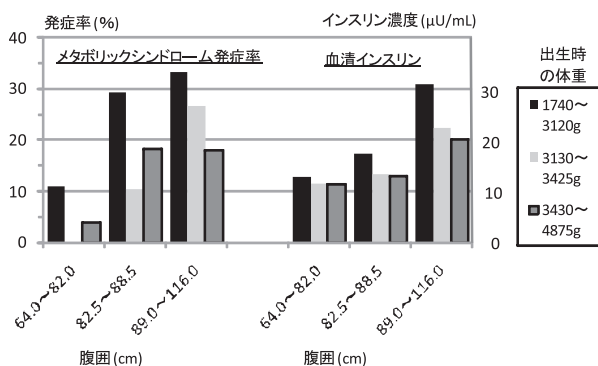


図3 日本人肥満男児における出生体重と腹囲の3分法によるメタボリックシンドローム発症率と血清インスリン濃度との関係^{11～12)}

研究より、2500g以下の低出生体重児は心血管障害による死亡のリスク因子であるというBarker仮説を提唱した⁹⁾。その後、GluckmanとHansonは「発達期の環境の変化に対応した不可逆的な反応 (developmental plasticity) が生じると、発達が完了した時期の環境とマッチすれば健康に生活できるし、もしマッチしなければ成人期のさまざまな疾患の源となる」という考

え方を「Developmental Origins of Health and Disease (DOHaD)」として提唱した¹⁰⁾。すなわち、胎児期の低栄養環境によって低体重で生まれた子どもが出生後に過栄養の環境になると、出生前後の環境ミスマッチにより肥満を引き起こすという考え方である。図3には、新潟県の肥満小児（10～12歳、男子261人、女子125人）を対象に、出生体重と腹囲をそれぞれ3分法で分類し9群に分け、メタボリックシンドロームの発症率と血中インスリン濃度を比較検討したKikuchiらの調査報告を図示した（男子のデータのみ表示）。出生体重が小さく、腹囲が大きい方がメタボリックシンドロームの発症率が高く、また血中インスリン濃度も高い¹¹⁻¹²⁾。国内の報告はまだ少ないが、肥満小児の血圧、インスリン濃度、血中脂質、血糖、HbA1c等と出生時体重との関連を示唆する報告が徐々に集積してきている¹³⁾。

日本の出生状況

日本の平均出生体重は、戦後の食生活改善という母体の体格向上により1980年までは上昇していたが、それ以降は一転して減少に転じた。1990年以降は出生数も減少に転じ、2500g以下の低出生体重児の出生割合が増加の一途をたどっている（図4）。現在の日本の平均出生体重は1940年代の体重まで低下している。極小出生体重児の生存率が高くなったこともあるが、この飽食の日本に正期出産の低出生体重児が急増している現象は世界的にみても非常に奇異な

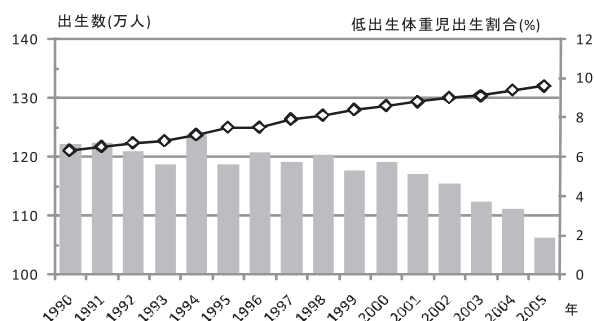


図4 日本の出生数と低出生体重児の出生率（日本人口動態）

現象である。このような低出生体重児の増加には、出産期年齢の女性の強い瘦身願望と低いBMIとの関連が強く指摘されている。そして、若年女性の瘦身化は前述したように学童期の女兒まで広がっている。母親となる女性の低栄養状態と瘦身は低出生体重児を増やし、日本人のメタボリックシンドローム罹患率の増加に拍車をかけることになる。

おわりに

2008年4月に40～74歳の全国民を対象にメタボリックシンドロームの対策に重点を絞った「特定健診・特定保健指導」の制度がスタートし国民のメタボ認知度も高まった。さらに、胎児・子どもに対して健全な栄養、生活、そして食育の環境を整えることが長い日本の将来を見据えたメタボ予防として不可欠な課題であろう。

参考文献

- 1) メタボリックシンドロームの診断基準検討委員会：メタボリックシンドロームの疾患概念の確立と診断基準の設定。2005
- 2) 平成20年 国民健康・栄養調査結果の概要
- 3) 平成21年度 文部科学省 学校保健統計調査速報
- 4) 平成19年 国民健康・栄養調査結果報告

- 5) Klish WJ, Childhood obesity : Pathophysiology and treatment. Acta Paediatr Jpn 37, 1 - 6 (1995)
- 6) 児玉浩子 小児を生活習慣病から守る食習慣－食育の立場から。日医誌 136, 2361 - 2365 (2008)
- 7) 内山聖、菊池透、長崎啓祐、朴直樹 高血圧。小児内科 38、1577 - 1580 (2006)
- 8) 浦上達彦 2型糖尿病 小児内科 38、1587 - 1590 (2006)
- 9) Barker DJ, Osmond C. Infant mortality, Childhood nutrition and ischaemic heart disease in England and Wales. Lancet 1 (8489) : 1077 - 1081 (1986)
- 10) Gluckman PD, Hanson MA. Living with the past: evolution, development and patterns of disease. Science 305, 1773 - 1776 (2004)
- 11) Abe Y, Kikuchi T, Nagasaki K, Hiura M, Tanaka Y, Ogawa Y, Uchiyama M. Lower birth weight associated with current overweight status is related with the metabolic syndrome in obese Japanese children. Hypertens Res. Jul ; 30 (7) : 627 - 634 (2007)
- 12) Kikuchi T, Nagasaki K, Hiura M, et.al. Developmental origins of adult health and disease : A pediatric perspective in current Japan. 2nd Hiroshima Conference on Education and Science in Dentistry 2007, 61 - 64 (2007)
- 13) 板橋家頭夫、松田義雄編集、「DOHaD その基礎と臨床」金原出版(株)、東京 (2008)

☆ 本特集「子どもについて考える」は、紀要編集委員会が企画し、本学教員に原稿依頼したものである。